

電気新聞 連載

時評「ウエーブ」 第四回

決して忘れずに…

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

時評「ウエーブ」 第四回 決して忘れずに…

政治家が「国民の目線で」と言うのを、しばしば耳にするようになった。本気なのかと疑うのは、私だけだろうか。

世界銀行の部下に意思が伝わらず、悩んだ昔を思い出す。相談にのってくれた経営コンサルタントに「悩むと大損」と、笑われた。「人間の耳は選り好みをするし、自分に都合よく聞き取るようにもできている。だから、何事も繰り返すこと。壊れたレコードのようにね。自分自身に聞き飽きて、うんざり諦めかける頃、やつと通じるものなのだ」。半信半疑で試してみたら本当で、人の上に立つのは難しいと、心底感じ入った。

人間の五感はみな同じ造りなのか、他人の目線に我が身を置くことは、易しそうで難しい。言語と文化を共有する日本人の間でもそうだから、全世界から集まった職員が100カ国以上に散らばって仕事をする世銀ではなおさらのこと。

その上、殆どの職員が経済的に恵まれた家庭の出身。貧苦を知らない。世銀の使命は「貧困のない世界を創る」こと。発展途上国の国民は、株主で顧客でもある。本気で貧民の目線に立つ努力をしなければ、大間違いのもとになる。

だから、部下全員に担当国の貧村で1〜2週間ホームステイをするようにと貧困の体験学習を促した。躊躇する部下を励まし、「民の汗水が我らの給料だ。決して忘れるな！」と叱り、それでも拒否すれば「部下とは思わない」。もともと頑固者だが、いくら陰口をたたかれても通したのは、自分の恥ずかしい体験があったから。

融資担当職に転任直後、パキスタンで付き合いのあったNGO会長に勧められて貧村ホームステイをした。ホストファミリーに荷を解いた途端、心の片隅に潜んでいた偏見が幽霊の如く現れた。無識字の貧民をアパ（父）アマ（母）と呼び、自分の生きる術を託すことに、大きな抵抗を感じた。無意識にでも貧しい人々を見下していた自分を見て、ぞっとした。

小学校にも行けなかった父と母は無識字を記憶力で克服し、知識欲旺盛だった。BBCラジオのウルドウ（パキスタンの国語）サービスで世界情勢を把握し、為替市場の変動まで知っていた。畑仕事や水汲みをしながら投げかける為替レートや財政・貿易政策に関する鋭い質問に答えられず、「博士号を返上しようか」と悩む私を見ては笑いこけた。アマに「学問の有無と、知識や英知の有無を、とり違えないように」と諭された。

貧しい人々の視点からこの世を覗く知恵も授かった。アパもアマも、素晴らしいリーダーシップの持ち主だった。貧しいからこそ、何事にも捨て身で挑戦する勇氣に恵まれていた。村の貧しさの原因を考えぬき、世銀など考えも及ばない程斬新的な対策案を持っていた。実現への障害は、貧民の意見など聞く耳さえ持たない政治家と役人。村人は政治さえ良ければと悲しみ、欲と金で動く傲慢な権力者を悪魔と呼び、「ミエコが来るまでは世銀も悪魔の仲間さ」と笑った。その可能性は低くないと気付かされて、またぞつとした。

貧村滞在を必須として、組織の意識改革を始めても、迷いがあった。そんな時、ハーバードの経営学教授が、某IT企業の実例を教えてくれた。IT技術専門社員を小売店に配置。新製品を買う客に頼み込んで家や職場まで追従。箱を開けてから製品が動きだすまで、客の一举一動も見逃さずに観察。その体験は社員の顧客意識を情熱化し、短期間で組織のDNAを変え、使いやすく壊れぬ製品の開発に繋がり、会社を大飛躍させたそうだ。迷いなど吹っ飛んだ。

本気で「国民の目線」をとったら、後期高齢者問題など起こらなかったはず。年金・社会保障制度に携わる政治家と官僚に、100円も無駄にできない生活苦を体験してもらいたい。国民の汗水を給料に頂戴する身を、決して忘れずに。

著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。

個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇八年七月一四日付の電気新聞に、寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。